

21 世紀 COE プログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

Establishment of World Organization for Kambun Studies

三島中洲研究

vol. 1

2006 年 3 月

二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム

三島中洲研究

目次	i
はじめに	町 泉寿郎
特別講演	
善隣訳書館と岡本章庵	狭間 直樹
例会発表要旨	
三島中洲研究会再開にあたって	中村 義
株暴落の一件—中洲の親族への手紙—	三島 正明
伊勢遊学時代の三島中洲	町 泉寿郎
三島中洲の実学思想	奈良 方直
三島中洲「洗心洞篇記」を読む	中根 公雄
大城戸宗重について	町 泉寿郎
『洗心洞篇記』一則—義利政別の一例として—	松川 健二
中洲・青淵の両『論語講義』学而篇	久米 晋平
三島中洲年譜作成の必要性	町 泉寿郎
中洲、二松と大陸との関わり	三島 正明
二松学会の成立と展開—日本近代高等教育制度史の一特質—	神立 春樹
(研究)年譜・年表について	中村 義
三島中洲の紀行文—『中洲文稿』第一集「玉川網香魚記」	竹下 悦子
那智左伝—神と儒のはざまで—	奈良 方直
聖書と方谷と東行と	松川 健二
二松学会大学図書館の未整理資料に関する一報告—戦後の二松学会—	川邊 雄大
西田幾多郎と漢学	三島 正明
三島中洲『日本外史論文長解』について	濱野靖一郎
方谷「論学弊賦似諸生」詩について	松川 健二

資料欄

三島中洲書簡(三島多喜宛)・・・・・・・・・・・・・・・・	三島 正明	53
三島中洲書簡(小野慎一郎・静夫宛)・・・・・・・・	町 泉寿郎	56
訓読「読流心洞箱記」・・・・・・・・・・・・・・・・	中根 公雄	62
大城戸宗重碑文・・・・・・・・・・・・・・・・	町 泉寿郎	63
日本近代高等教育制度史関係年表・・・・・・・・	神立 春樹	64
三島中洲『袖中日記』一その1・・・・・・・・	町 泉寿郎	66
那智淳斎撰「祖考那智加賀正君行状」	奈良 方直	69
塩田良平書簡(山田準宛)・・・・・・・・	川邊 雄大	71
山田士表に答うる書・・・・・・・・	渡邊 賢	74
三島中洲『日本外史論文段解』	濱野靖一郎	83
附録		
三島中洲年譜	三島 正明	86
研究会記録		97

はじめに

「個性かがやく大学づくり」とは、しばしば耳にし目にしてきた、21世紀COEプログラムのいわばキャッチコピーのごときもの。大学の個性、アイデンティティーをどこに求めるべきか。我々はこれに応ずるに「日本漢文学」を以てし、申請時より今日に至るまで、「日本漢文学」の内実、またその研究教育体制の構築について真剣な討議を重ねてきた。

そうした議論の過程で、従前行われていて、しばらく中断していた「三島中洲研究会」を再開しようという気運が、有志の間に自然に起った。そこには、そもそも二松学舎とは何なのか、学祖三島中洲とは何者なのか、という虚かな問い、それなくして今日の我々のアイデンティティーを確認しようがない、その問いに真面目に応えようとする共通の願いがこめられているのである。

第1回の会合は、すでにこのCOEプログラムの採択前の2004年6月12日に持たれ、爾来、月例会として開催され、2005年度末までに例会19回、

31報告をかさねている。この間、2005年度からは、このたびのCOEプログラムの、近世・近代日本漢文班の「課題」の一つとしての「三島中洲研究」に組み込まれたのである。講師には、学外からも招いた特別講演(狭間直樹・藤井昇三両氏)を2回、プログラム日中文化交流班との共催によるシンポジウムも1回、それぞれ開催してきた(研究会記録参照)。

本書は、そのうち第1回から第12回(2004.6~2005.6)までの例会発表についての報告要旨およびその資料と、狭間直樹氏による特別講演(2005.7)とをまとめたものである。巻末に、附録として、三島正明氏作成の「三島中洲年譜」を収載した。

この研究会への参加者はまことに散漫、共通点としては、三島中洲にいくらかの関心がある、そして我が二松学舎に何らかの縁がある、という点だけだと言ってもよい。各人の専門領域は、日本近代史・日本教育史・日本近世思想史から、中国思想史・日本漢文研究

におよぶ多岐にわたっている。したがって、自然、報告の形式・内容も統一的ではない。学祖三島その人の研究もさることながら、三島の生きた時代とその学藝・文化をめぐる諸問題を、それぞれ独自の視点から報告が行われてきた。

そして、これが学際的な研究会としての理想的なあるべき姿ではないのか、と自負もしている。その報告内容は、三島の生きた数奇な人生と連関して、江戸後期から明治大正期に至る日本近代の思想と文学の諸状況、そして教育・社会・経済の変遷を含んだ巨大な文化の動きをめぐる諸問題を、テーマとしたものであるからだ。学祖顕彰の学校史から出て、近代文明史の実相を探るひろがり及びつつある。

ことに、日本近代における「漢学」の意義付けについて、この恣意的に解釈したままの「漢学」に何ら方向性をみないまま100年を経過しているのであるが、近年、注目すべき研究も見えている(例えば斎藤希史『漢文脈の近代』2005など)が、従来の日本思想史・教育史研究上、必ずしも十分な討究がな

されず、これからの研究に俟つところが大きい。二松学舎の歴史とその学祖の事蹟・学績を、幅広い視座から検証することは、この意義評価の定まらない「漢学」分野において、いくらかの貢献を果たすはずのものである。

以上のため、現在なお中洲とその師山田方谷の豊富な詩文を丹念に読みといていく、また中洲の伝記を詳しく調査する、といった資料発掘と解析を継続していくのである。一つの目標として、三島中洲の精確な「年譜」とその「全集」の編纂・刊行にこぎつけたい。

(2006.03.25 町 泉寿郎)

(謝辞) 講演の収録を許諾いただいた
狭間直樹先生に厚く感謝申し上げます。

※三島中洲(1830~1919) 備中松山藩に
仕え、維新後は大審院判事・東大教授・
東宮侍講などを歴任。

二松学舎、1877 漢学塾として開校。1928
専門学校。1949 大学昇格。